

氏名	福田 彩
氏名	FUKUDA, Aya
学位の種類	博士 (学術)
学位記番号	甲 第 201 号
学位授与年月日	2017年6月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	Education and Peacebuilding: Instructional Design for a Multilateral Distance Learning Program in Peace and Conflict Studies 教育と平和構築： 平和構築・紛争予防学における多国間遠隔教育プログラムの インストラクショナルデザイン
論文審査委員	主査 教授 鄭 仁 星 副査 教授 伊勢崎 賢 治 (東京外国語大学) 副査 教授 西 村 幹 子 副査 教授 マーク W. ランガガー

---

## 論文内容の要旨

教育による平和への取り組みは、長い間実施されてきた。高等教育における平和への教育は、共通の目的として社会変革のための理論と実践の融合を掲げながら、平和学や平和構築・紛争予防学のようにいくつかの分野に分かれている (Kodama, Sato, & Nakanishi, 2004)。現在まで、様々な分野の著名な学者たちが平和への教育に貢献してきた。

このような平和への教育の継続的な努力にも関わらず、世界は平和になったとは言い難い。主な原因のひとつには、武力紛争の特徴の変化があげられるだろう。平和への教育は、近年の武力紛争やテロリズムに対抗するための認知プロセスの多様な要素を十分に組み込み、この変化に十分に対応してきているとは言い難い。Richmond (2008)、Galtung and Webel (2007)、Piaget (1974)、Allport (1960)、Kodama, Sato and Nakanishi (2004) や Ikeo (2002) など様々な研究者が指摘するように、現在の平和への教育は、a) 不十分な内容、b) 知識偏重型アプローチ、c) 偏った教授法という限界がある。

これらの課題に対応すべく、平和への教育に携わる教員たちによりさまざまな努力がなされてきた。そのうちのひとつが、平和への教育の各分野の教員の国際的なチームによって始められたグローバル・キャンパスプログラム(GCP)である。GCPは、6つの紛争経験国・地域の9つの大学をビデオ会議システムで同期接続する、高等教育レベルにおける平和構築・紛争予防分野の多国間遠隔教育プログラムである。このGCPでは、知識獲得だけでなく、様々な大学からの参加者同士のインタラクションに重きを置いている。GCPは多国間の遠隔教育プログラムであ

るため、この特殊な状況に特化しプログラムを的確にゴールに導く ID モデルが開発される必要があった。

そこで本研究では、平和構築・紛争予防学における多国間遠隔教育プログラム(GCP)に特化した ID モデルを開発し、開発された ID モデルを適用して実施された GCP を評価することを目的とした。研究課題は以下の通りである。

- 平和構築・紛争予防分野における多国間遠隔教育をデザインするための ID モデルの主なステージと各ステージに続くサブステップはどのようなものになるか(特に GCP を対象として)。
- 開発した ID モデルを適用した GCP 実施中に、教員や学生にとって問題となることはあったか。
- 開発した ID モデルを適用して実施した GCP は、平和構築に必要とされるであろう学生の脱中心化、モラル、価値、スキルを発達させることに貢献したか。

これらの質問に答えるため、本研究は 2 回の予備研究と 1 回の主研究を実施した。評価手法としては、アウトカム評価とプロセス評価を採択した。プロセス評価では参加者の満足度の程度および問題があるかどうかを調査した。アウトカム評価において、脱中心化は心理的尺度を用いて、モラルは道徳からの離脱の尺度を用いて、価値は社会正義の程度を測定する尺度を用いて、スキルについては異文化コミュニケーション能力の尺度を用いて測定した。

3 つの研究では以下が明らかになった。最初に開発された ID モデルの主なステップ、1) 分析、2) ゴールと目標の決定、3) コース構成の協議、4) コースデザイン、5) コース実践、6) コース評価は GCP を実施するにあたり適当であり、各ステップに続くほとんどのサブステップも妥当であることが確認された。しかし、サブステップ「インタラクションデザイン」に関しては、学生間での更なるインタラクションを促進するために改善が必要だということがわかった。実践において問題があったかどうかに関しては、教員はスケジュール、内容、コミュニケーション、コーディネーションとタイムマネジメントの側面を問題として指摘した。学生の満足度は概ね高かったが、彼らからは態度、内容、コーディネーション、情報、インタラクション、言語、ビデオ会議の質、スピーキングの側面が問題として指摘された。GCP が学生の脱中心化、モラル、価値、スキルの発達に貢献したかどうかについては、主研究のみ測定した異文化コミュニケーション能力には向上が見られ、他の側面に関しては 3 つの研究を通してほぼ有意な結果は見られなかった。

以上の研究結果を以て、以下のことがいえるだろう。多国間の教育プログラムである GCP 実施のために特に開発した ID モデルにおいては、「ゴールと目標の決定」「コース構成の協議」の 2 つのステップが特にユニークであった。学生の脱中心化、モラル、価値、スキルの発達が期待していたほど見られなかった原因については、ID モデル、研究実施のロジックモデル、オンラインインタラクションの質、教員とコーディネーターの役割、研究手法等に原因があるかもしれないと推察できる。そして最後に研究は、参加者間でのスムーズな異文化コミュニケーション

ョンにおいて、IDモデルの中に「足場かけ」の仕組みを組み込むことを提案した。

本研究は、平和への教育とインストラクショナルデザインの融合に、実務的、学術的に貢献したといえるだろう。実務的には、最終的に提案したIDモデルが似たような多国間の遠隔教育プログラムを実施する実務者にとって役立つことを願う。また、学術的には、最終的に提案したIDモデルそのものが教育工学分野におけるIDモデルのひとつとして一覧に加わることを望む。

一方、異文化コミュニケーション能力が向上したという肯定的な研究結果は、あくまでそれを測定した主研究のみに限定されること、また、今回対象となったGCPの参加者の学生は、各国ではごく少ない人口である大学生であるということと、更にその中でも平和構築・紛争予防分野に高い関心を持つ特別な集団であったことは特記する必要があるだろう。

## 論文審査結果の要旨

福田彩氏の最終審査は、教育研究棟の I-247 にて、2017 年 6 月 2 日の午後 1 時 50 分から 3 時 20 分まで実施された。博士論文と入念なインタビュー審査の結果、福田氏は課題の提示の仕方、研究の主眼および結果において質の良い論文を執筆し、平和教育と教育工学の分野に対して貢献したということ博士論文審査委員会は合意した。また、審査委員は、福田氏が当該分野において求められる、自信を持った研究者および実務家としての能力を身につけたことを合意した。従って、審査委員会は満場一致で福田氏が博士課程における最終審査を通過したことを承認した。

福田氏の博士論文は良く構成されており的確に提示されている。論文は 6 章からなる。1 章では、問題と研究課題が明確に提示されている。2 章では、平和教育の実践の現状と課題について文献レビューが明確に提示され、遠隔教育とインストラクショナルデザインモデルの可能性についても、理論的な道筋で綿密に提示されている。3 章では、研究課題や手続き、データ収集・分析と尺度等についてアクション・リサーチデザインが用いられ入念に説明された。4 章においては、2 つの準備研究と 1 つの主研究の研究結果が綿密に報告されている。5 章では、平和教育のためのインストラクショナルデザインモデルと学生の価値判断基準や異文化コミュニケーション能力の変容に着目しながら、先行研究と関連付けられた主要な研究結果についてのディスカッションが展開される。6 章では、研究結果の要約と研究結果の示唆が多角的に検討されている。

本研究は、平和構築・紛争予防学における多国間遠隔教育プログラムのためのインストラクショナルデザイン (ID) モデルが開発され、それがプログラム実施に適用され、その ID モデルのステップやサブステップがプログラムデザインや実施に必要なものであったか、またその ID モデルを適用して実施されたプログラムは学生の学習や平和構築に必要な能力を身に付けたことに寄与したかどうかを評価した。研究結果に基づいて、研究は最後に、平和構築・紛争予防学分野における多国間遠隔教育を実施するにあたって必要な最終版の ID モデルを提案した。

審査員は、本研究が、特に文化的に異なる背景を持つ学生と教員によって行われる、平和構築・紛争予防学の遠隔教育において、インストラクショナルデザインのさらなる発展に寄与すると考える。研究を経て最終的に提示された ID モデルは、教員やインストラクショナルデザイナーにプログラム実施の準備段階から協議・協調することを促し、効果的な参加型の多国間遠隔教育を行うことに役に立つだろう。

本論文は概ね良く書かれている。しかしながら、審査委員は本論文をよりよくするための提案を行った。第一に、一貫性を持ちながら的確に特定の用語や単語が使用されているかどうか、リファレンス、フォント、ヘディング、表や図について APA 方式で示されているかどうかの再確認が必要である。また、巻末資料において、インストラクショナルデザインの活動の結果として展開されたコース内容や戦略を示すことも必要である。最後に、終章において、多国間遠

隔教育プログラムの目標を達成するためのインストラクターと学生の動的な役割についてもさらに付け加えられると良いだろう。

これらの審査結果に基づき、我々はこの候補者に博士号が授与されるよう、推奨するものである。

結びに、審査委員会は、福田彩氏の多大なる努力を認め、本論文審査の成功を祝福する。